

小田原市文化振興審議会 第10回会議概要

1 日 時 令和6年7月22日（月）10：00～11：30

2 場 所 おだわら市民交流センターUMECO 会議室 3

3 出席者

（1）委員

杉本委員、吉田委員、大石委員、白井委員、木村委員、萩原委員、外郎委員、
鈴木委員、池田委員、浅井委員

（2）行政

大木文化部長、諏訪部文化部副部長、早野文化政策課長、黄金井文化政策係長、
穂坂主査、今宮主任

4 傍聴者 0人

5 会議の概要

（1）議題（1）新たな文化振興策について

事務局より説明

A 委員

まちなかで、複数拠点で実施するのはいいことだと思う。三の丸ホールを拠点として、各地域に点在する施設を使用すると、回遊性が高まる。

三の丸ホールでは、いろいろな団体がギャラリー回廊等で展示などを行っているため、差別化というか、「WEEK」だと分かるように、目立たせる方法を考えた方がいい。

また、予算が許すなら、毎年実施した方がいいのではないか。カルチャーアワードとリンクさせてもいいと思う。例えば、アワード受賞者等に各地域で何かやってもらうでもいい。WEEK 期間と、アワードの応募か表彰のタイミングをリンクさせてもいいのではないか。

B 委員

WEEK のような事業は賛成。しかし、文化活動というのはずっと行われているもので、その期間のために準備して発表する、という流れになってしまうのはどうかと思っている。大切なのは、通常時の文化活動をいかにサポートできるか。発表する場があるのはもちろんいいことだが、皆が活動などの情報を共有できて、更に連携できる仕組みが必要。各芸術文化に関わる人がメンバーとなって、平時から情報共有や連携ができるようなプラットフォームがあった方がいいと考えている。

昨年度、アワードに関わって強く感じたのは、すでに素晴らしい活動をしている人がたくさんいるにもかかわらず、お互いがお互いを知らない、ということ。新たな事業を実施して

いく前に、サポートするためのプラットフォームを作る必要性を感じた。WEEK は、その中の一つとなればいいのではないか。運営の継続性にもつながる。

C 委員

市民会館跡地のような、まちなかを歩いていて自然と視界に入る、オープンな場所が拠点としてあると、周知や PR がしやすいと感じた。

D 委員

開催頻度について、2・3年に1回でいいかと思う。

今回、普段活動していない地区で行ったところ、我々の活動を知る人があまりいなかった。近隣の家々を回り活動について宣伝した際、保育園や学校、自治会、駅の方等多くの人が協力してくれ、様々な提案もいただいた。知らない人たちと出会え、1日だけの活動でも、大きな成果があったと感じている。

また次につなげようと、現在、活動の際に皆で描いた絵を、我々の拠点で展示している。自分の描いた絵が飾られるという事で、普段活動していない地区の人もギャラリーを訪れてくれ、相互の繋がりが広がっていることを実感した。

E 委員

地域にもいろいろな文化活動団体や会がある。それらがうまくマッチングができるのではないか。発表の場ができるのなら、地域でも協力できると思う。アワードを中心としてやっていくのもいいと思うが、地域もうまく乗れるような仕組みができると、より盛り上がる。お互いがうまくマッチングして、一つになっていくといい。

F 委員

かつての市民文化祭では、メイン会場が市民会館・けやきに限定されていた。新しい事業であれば、三の丸ホールは広報発信の場所に限定して、広く地域の様々な場所で展開して実施した方がいい。市民文化祭や市美術展は、担当課の職員が一定期間、総動員でやらないと実現できていない。実行委員会形式で実施することだが、事務局も含めマンパワーをどうするか、市職員以外の、実行部隊の確保について検討した方がいい。

これからは、自分たちの活動を発表するだけでなく、どうやって地域社会に還元していくかを考えていく時代だと思う。例えば将来的に、先生が部活指導できなくなり、学校の部活がなくなってしまうとなった時に、地域で指導できる人が関われば、実施が可能になる。

まちの変化・時代性を考え、活動をしている人の、地域社会での活動展開を、コーディネートし動かしていく事務局的な人がいると、できることが広がっていく。そういった仕組みを作った方がいいのではないか。

G 委員

市内いろんな場所で開催することに意味があると感じた。

市内で頑張っている人、団体も多くいるが、ホールの稼働率も高く、発表の場が足りていない。この機会に各地域のいろいろな場所でできたら、そういった人の活動の幅が広がる。

また、11 月はイベントが多い時期なので、調整等も大変かと思うが、例えばツーデーマーチなどの開催に合わせて、お城の横で何かやるのもいいかもしれない。

H 委員

準備期間があれば、イメージしている事業はできると思う。ただやはり、事業を動かすシステム作りをしっかりとしないといけない。市民の文化活動サークルなどは思いが強く、その思いの強さが障害になることもある。理念を伝え、新しい世代も一緒にやっていける雰囲気にしないと難しい。

場所については、自治会や地域の場所を、その地域以外の人も使えるような仕組みを作ってもらえるといいなと考えている。

I 委員

2・3 年に一度の実施だと忘れてしまうかもしれない。

実施にあたっては、参加団体が相互に関わりが持て、情報交換できるといい。

更に WEEK 実施期間外でも、その関わりを継続していける仕組みができるといいと思う。

J 委員

小田原はコンテンツがたくさんある。民間施設で活動している団体等も増えてきた。

市内のコンテンツ・場所・時間がどれくらいあるか、一度リサーチしてみた方がいいかもしれない。まちなかに広げ、展開していくのであれば、それらを把握してから新たな事業を実施した方がいいと思う。

文化活動には、大きな活動と小さな活動の 2 つがある。ホールで有料のコンサートを実施し、自立して興行が成り立つような大きな活動は非日常。ウェルビーイング(Well-being)という考え方があり、今後は、市民が日常的に行う小さな活動・イベントにスポットを当てることが重要だと思う。小さな活動を大切に、平日に行われる日常的な活動を増やすことが大事だと考える。市外の人も、明らかにお金のために実施されているイベントには、あまり行こうと思わない。文化活動はそういうものではないと思う。

アワードも、そういう意味があったと思う。アワードの実施方法について、1 週間くらいの期間の中で、活動を行ってもらい、賞を選ぶという方法もある。WEEK と別々にやるより、リンクした方がいいと思う。

運営方法については、やはり仕組みややり方を考えた方がいい。若い人にやってもらいたいし、地域でもいろいろな所があると思うが、文化コミュニティを作るのはいいと思う。

湯河原ではアート散歩を実施している。工房を持っている人の情報を一つの地図の中にまとめ、気楽に好きな時に、その拠点を巡って行ける。じわじわとだが、それなりに集客している。また、県の主催事業である邸園文化祭では、県は運営サポートと冊子作りだけを行い、情報発信に特化している。行政が考えてイベントをやるよりもいいのではないか。

F 委員

団体がなんの後ろ盾もなく、単独で直接学校に入っていくのは難しい。市が付いていると、学校も受け入れやすい。市の事業としてやる必要はないと思うが、バックアップとして市が付かないと、乗り越えられない壁があると思う。

震災の際の、被災地域での民間ボランティア活動は、地元の自治会・商店街等の、力あるお年寄りが受け入れの中心になってくれたためできた。地域社会の中で、特に若者が活動する際に、地元の年配の人が受け入れてくれ、信頼を勝ち得た上で活動するという展開だと、その後も継続する。やはりお墨付きというものが要かと思う。小田原にも、そういう土壤がある。

J 委員

アワードから WEEK に展開していくものだと思っていた。アワードを広げていきたい。市がバックアップすることは必要だが、きつくしてしまうとそれだと縛りが強くなる。

F 委員

アワードをやって、良かったと思う事が2つある。

一つは、知らなかった団体・人が見つけられたこと。もう一つは、今までの活動通りにやっても結果が出ず、活動に対する認識を改めるきっかけになったこと。

J 委員

アワードの受賞者や活動団体同士の、交流の場が増やせるといい。アワードの実施は間違いなく励みになっており、アワードと WEEK を絡めていくべきだと思う。それぞれの実行委員がそれぞれやるのでは大変である。

また、アワードの評価ポイントをもう少し明確にした方がいいと感じている。

A 委員

アワードは元々、我々が知らない活動・団体をあぶりだして賞金を与え、活動資金にしてもらうことによって、活動をより活性化していくという趣旨があったと思う。

どこの文化活動団体も、後継者が課題となっていて、だからこそもっと活動を知ってもらいたいと考えている。そして実際、子供を巻き込み、主役になっている文化活動は続いている。

いかに活動を地域に広げようとしているか、次の世代へつなげていくため何をやってい

るか。この部分の評価をポイントとし、アワードで何をしようとしているかを、明確にした方がいい。また、市長のコンセプトにあったものを盛り込むのもいい。

市は、活動を支えるための機能は根本的にアワードにあると考えているが、市民に、文化にもっと関心を持ってほしいとも考えて、今回お披露目をする場所を提案したのだと思う。

J 委員

市民はもともと持っているという視点でやった方がいいと思っている。あなたの持っている文化的なものを社会に出してください、というメッセージを発信していった方がいい。うまく社会に出てきていないだけだと思う。

A 委員

流派みたいなものもあって、皆が同じレベルで関心を持てないこともある。

皆に知ってもらおうという点では、アワードの評価の中で、「いかに広がりを持つ活動をしているか」という部分を大事にしてもいいと思う。

B 委員

アワードは、最終目的ではなく、一つの方法・手段。しかし、やってみたら、たくさんの学びがあった。一番知らなかったのは参加者同士だったのではないかな。

大切なのは基本計画を実行すること。計画実現のためにはやはりきちんとした組織を作ることが必要。基本的な事務局機能を持ち、ある程度の予算があれば、継続的な組織運営は可能だと考える。そして、行政がどれだけサポートできるかということ。小田原市がサポートに入るべきだと考えている。

イベントを市の一つの部署が全部担って実施するのは非常に大変なこと。人員の確保も考えなければならないが、近年、人材は副業という形でも入ることが可能となっている。また、教育関係が絡まないといけないと思っているので、教育委員会にも組織に入ってもらった方がいい。

しかしながら、これはすぐにはできないと思う。まずは議論をしつつ、できることをスモールスタートでやっていくのがいいと思う。

C 委員

アワード受賞者が別の新たな活動団体を支える、次のアワードに影響を与える。といったことができればいい。

I 委員

アワードと WEEK がつながり、それを目に見える形で事業計画が組まれるなどすると、分かりやすくいいと思う。そしてそれを支える組織があった方がいい。

J 委員

文化活動はテーマがある。そして各地域があって、それらを掛け合わせていくことが大事。テーマは、審議会で計画の中に 9 つの文化を出しているが、まだ印象が弱いと思う。きちっと出して行って欲しい。

地域には、公民館やそれ以外のスペースもあるので、それをどう使用できるかがテーマ。しかし、若い人たちがなかなか使用できず、新しい団体も入ることが難しい。そのマッチングを担う必要があるかもしれない。

H 委員

コロナの際、Wi-Fi が全公民館に整備された。コロナ時期に自宅で仕事をしていた人が、家には子どもがいるため、仕事を公民館でできないかという話があり、利用について検討しているという話があった。しかし、公民館は自治会の持ち物で、まずは自治会の理解を得なくては行けない。中心になっている 70 代の方々の了解を得る段階で、難航していた。

まずは駅の近くや、利便性の高い場所、自治会の理解のある地域の公民館で、利用の検討をしてみてはどうか。少しずつ、利用できる場所が増えていけばいいなと思っている。

他地区からやって来た人、移住者が公民館に興味を持って来ることがあるが、地元の人でないと、場所も使用方法もわからない。文化的な活動スペースとして公民館が開かれていくのは、いいことだと思っている。

J 委員

文化 SPACE を発見していく必要がある。今年は活動の場所の調査をやってみてはどうか。市民会館跡地については、今年方向性が出てくると思う。中心街のエリアマネジメントを都市部が行っていて、様々な場所の活用方法の検討が進んでおり、UDC でも、中心街をどうするかを検討している状況である。

文化部副部長

皆様からヒントをいただいたので、検討を進める。

アワードは知らないことをたくさん知れた。これからどうやって地域に繋げていくのかを文化活動を行っている皆さんにも考えていただけたらありがたいと思っている。

アワードの審査基準等も含めて、考えていきたい。ご意見ありがとうございました。

文化政策課長

これからの小田原の文化活動についてもご意見いただき、ありがとうございます。地域の活動の在り方、組織の在り方、市のかかわり方などを含め、今回の提案内容の検討を進める。

(1) その他について 事務局より説明